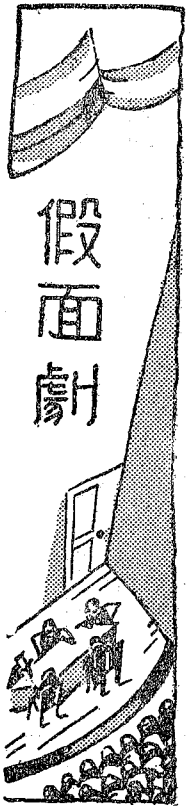

雲動けども山動かず

海月澄無影遊魚獨自迷との古句を思ひ出されて政變來に對する世評をば雲が動くのを見て山が動くと見る樣だがマダ山は動かないと高橋達磨先生は看破した、事の眞相を知り得ないものが徒らに揣摩臆測を逞ふして彼是れと論ずるものがある、寔に迷惑な事だ、個人間の交際でも自己の錯覺や臆測で以て斯うもあるであらう、ああもあるであらうなと思ひ込んで獨りで苦しむことが少ない、其甚猜疑嫉妬心のあるものは獨斷的に他人の意中を推測して相手に迷惑をかくることがある、寔に氣の毒ぢや。國際間でも東洋の一國の如きは右と同一の途を歩んで平和なるべき國際關係に葛藤を惹起すことが多い、我國でも此の點は餘程考慮しなければならぬことぢや、聖ルカ病院の關係者の一人が米國人が巨額の費用を投じて病院を經營し主として日本人の爲めに盡力して居るが何物かを求めての仕事ぢやらう唯金錢を出して斯んな大事業を經營することはあるべき筈がないと或日本人から聞かれたので悲觀した、日本人には國際的に奉仕と云ふことがわからないだらうかとの話をしたと一友人から聞かされた、奉仕は無報酬であらねばならぬ　奉仕に報酬を望むのは矛盾である、奉仕の破壞である、友情の發露も亦同一である、疑へば野茨の花も幽靈に見える、猜めば同情も詭計と思はるゝ、痛くもない腹をさぐらるゝのは惱しきことだが探らるるものより探る方が苦しいものであることは事實だ、個人間でも國際間でも其理は一だ、雲動いても山の動かざる處に着眼することが大切である。

（七、五、妙法生）

交通道德と市民

交通の安全を計る爲めに警視廳方面や交通協會等では氣の毒な程盡力して居らるゝのであるが市民の公德熟中交通道德に關して自覺の乏しきことは日常吾々の目に餘る處である、夫れが夏向になると更らに露骨になつて來るのである、交通巡査の指揮に從はぬは勿論婦女子とか遠慮勝ちな男子な

注意

本欄は讀者諸氏の利用に提供す、治安と風俗とを害し又は人身攻擊に渉らざる限り奇想天外的の投稿を望む、一文は四百字位にて取捨は編輯子に一任、原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

どは自我的國民の暴威に惱まさるゝことが少なくない、例へば電車内で腰掛ける空席があつても運轉手臺近く立ちふさがつて向風を獨占するものの多くて出入に妨害を與へ他人に迷惑をかけても平然として居る。そうかと見ると無理やりに餘地なき處に割込んで苦しみを他に與へながら一言の挨拶もしない者がある、バスや電車を待ち合はす場合に自分は遲ればせに來ながら餘程待くたぶれたと思はる客があるにも拘はらず之等を押除けて乘車する者が少なくない、爲めに氣弱い者は數臺を待たさるゝのである、急ぐが故にバスを選ぶのは吾も人も同一だ先客あれば一通は之に乘車する餘地を與ふるの良風俗を涵養したきものである、吾れ勝ちな仕打は實に苦々しきことである、日本民族は優秀な民族性を有するものだとか八百萬の神々に守護せられて居る國民は日本人であるとか何にかに付けて自尊自信することを敎ゆる先達も存外個性的訓練を忘却して居ると觀らるゝ所がある、禮義を說いて禮義を忘れた國民がある、共存共榮を論じて自我的なエゴイストな排他的な國民がある、國民皆先きを爭ふて公德を重んずることとなればモット穩和な民族性が養はるることであらう。

（七、一〇、トウミン）

奇聲爆音の消滅

深夜オートバイの奇聲には安眠を破られ街頭では不意の爆音に吃驚驚天心も轉倒すばかりの心地する自轉車の警笛の奇聲には久しき間惱まされただが此奇聲爆音は必らず快速力の交通機具にはなくてはならぬものかと思ひ惱みながらも忍んで都會生活を續けて來たものだ、夫れが七月一日からピタリと止んで手押しラッパの緩やかな音のみが響くこととなつた、まことに靜かでイラ〳〵する氣がなくなつたが三四十年前の馬車鐵時代の街頭のラッパの音を思ひ出してそゞろに昔を偲ぶ心地もするが曉の夢の裡に聞く豆腐屋のラッパもやゝ似たものだ之れで事故が耳をかたずに眼に代つてのみ防止し得ることとなれば一石二鳥の得であるんである、醫視廳の當局者も喜んで居らるゝだらうが病院の患者達、陋巷の乳のみ兒も安眠が出來ることとなつた、だが都下二萬八千臺の自動車と九千臺のオートバイが悉く手押ラッパを使用することとなつたのでラッパ製造者は有頂天の喜びである、當つたり騷音防止策との讃辭を思ひ出したが或る熟練な運轉手の話を聞くと第一に自轉車乘の横から飛び出したとき　第二にボンヤリした歩行者が車道内で彷徨するとき第三に電車を乘り超すときの危險は此上なき思ひがする、大阪と東京とは人心が同一でない、彼地での成功も東京ではそうは行かぬとの事ぢや何にが何にやら。

（七、八、夏木生）

運轉手の佳話

流し圓タクの運轉手と云へば何んだかルーズの人物ばかりの樣に思はるゝが中々そ

んなものでない、先年地方の某技師が大切な書類入りのカバンを圓タク内に忘れて大に困却したが翌日旅館にそのカバンを届けたとの一佳話が昨年四月の本誌（一六五頁）に載せられてあつたが先日もまた一佳話が傳へられた、夫は某一夫人が大切な聖書を風呂敷に包んだまゝ圓タクに置き忘れて自宅に歸つた所が翌朝其夫人の宅に一運轉手が訪れて「昨日あれから日光まで御客を乘せて走つた、その客が置き忘れられた風呂敷を開いて見て君はよい御客を乘せたもんだ聖書が這入つて居ると言はれた昨夜は遲くなつたから只今一返しに來ました」と一個の風呂敷包を差出した夫人はこの運轉手の心掛けに感激して記念としてその大切な聖書を與へたと云ふことである、情けは人の爲めならず、己れより出づるものは己れに歸る、善にも惡にも因果關係がある、人道なるかなである。

（七、七、城南子）

これもバスのサービス？

NS新聞に東京市營バスのサービス振に就いての投書が載せられてあつた、其内に某夜の八時から九時までの間數寄屋橋の停留所に待つて居る客が數名待てど暮らせど市バスは來ないで青バス計り、十八分間をおいて六臺の市バスが葬式の行列みたいにやつて來た……とかく市電はラツシユアワー集中主義で配車調整の無能振りを遺憾なく發揮してをる、邪魔物のロボットサービス嬢を使つたり、安物の景品を出したりしてサービス改善とは驚くの外はないと云ふ意味のことである、實に以て當然の事を投書したものだ、電車なりバスなりの配車調節は餘程の工夫を要する、そこらに、ふら〳〵してをる臨休從業者を使用してもつと此點に努力しなければ口先ばかりのサービスや見當違ひの乘客優待振りでは他に乘客を奪取せらるゝばかりぢや、特に馬車鐵以

來因襲づけられたメダカ運轉即ち人の子一人乘らない淋しい處でも三臺連續にバスを運轉して十八分間も空しく客を待たする樣な配車振は斷然改善しなければならぬ、電車もバスも何時までもメダカ運轉をしてをつては赤字は益其數量を增加するのみであらう、七月十日の第三回バス車掌採用試驗の不成績に鑑みても市當局は更らに一段の苦心を要する、序に特區の設定も便利だが芝の虎の門から新橋驛＝地下鐵の終點地間の如く一般の變化に伴つてバス運轉を開始するを緊急とする場所がある、地下鐵は反對經營だから連絡を執るに及ばずなどゝ感情的な考をもたずに市民交通の便を計ることに着眼してもらひたいものである。

（七、二〇、ヨシクニ）

バス内の乘客をどうするか

某日の朝市營バスに乘つた運轉手臺のスグ横後には便乘の警官が立つてをる、サ程

込み合つてはをらぬが出入には警官か自分かが身をかわさなければ不自由である、處が某停留場で二三人の降車客があるのであつたが警官は泰然自若として居るので自分が運轉手の臺の左前に轉身した、スルと運轉手は内に入つて下さいそこは立つ處でないと言つた、女車掌も引續いて内に入つて下さいと言つた、勿論警官が便乘して居る事でもあるし、かた〳〵自己の職分上乘客に注意を加へた事で惡意でないことは明かであるが自分はよく車掌が出入口をあけて下さいと乘客に要求することを日々目擊して居る故に此朝は丁度自分が出入口に立つべく餘儀なくされて居るから身をかわしたまでだ、之を承知して居る車掌は感謝こそすれ、運轉手に共鳴しての事でも餘りに辨別心がなさ過ぎることである、警官は不動の姿勢である自分は親切心からの轉身である、此の如き些細な乘客の動作には運轉手や車掌の注意力を養成することがサービス改善の一ではあるまいか、後ろに目のなき運轉手が乘客の動作の環境まで知り得ることは出來ない、斯樣な場合には車掌は女なりとも千篇一律的な考をなさず乘客の感情を害しない樣に調和することが大切な事てある。

（七、二一、出勤生）

疑の絶えぬ世の中？

疑は人間に在り天に偽りなきものをとは羽衣曲中の一句であるが天を敬して行動する西郷隆盛も人の世では城山の露と化せざるを得なかつたものだ、とかく人の世の中には怪疑の事が絶へないものだ。前齋藤内閣は倒れんとして倒れず、政權が世人から意外と思はるゝ岡田啓介大將に移つた世人も新聞記者も雜誌記者も政治家も官吏もアツとばかりに驚いて怪疑の眼を見張つた、だが政權が世人の期待して居つた清浦氏にも宇垣氏にも平沼氏にも行かないので齋藤氏に再降下の大命があるなと思はれたのに何故に岡田氏に大命が降下されたか、倒れんとして倒れざるスロー行動の裡に齋藤氏の天才的腦力が如何なる處に用ひられたのか思ひ來れば二上氏が樞府から出て一木氏が樞相となり其以前に湯淺氏が宮相となつたなどの事態乃至岡田内閣組織に關しては世人の眼が盲して居るにあらずやと疑はざるを得ない、又鈴木政友會總裁及其周圍に在る大小政治家が齋藤内閣よりも岡田内閣に對して硬化したのは何故かまさか岡田氏が床次氏に對して慇懃を盡したからとの嫉妬心からの事ではなからう、だがまだ政綱も發表しない際に硬化態度に出た事だ大政黨の態度として怪疑に堪へない事だ、岡田内閣は新官僚内閣だと評せられておる、成る程十大政綱を見ると官僚内閣の臭味は十二分に在るが如く感ぜらるゝが町田床次其他諸氏の政黨員を閣僚に加へ其意見をも取り入れて政綱とするのでは純官僚主義とも思はれない官僚主義でも政黨主義でもなく何かの主義か黑幕の後にチラ〳〵する感がする之れも疑の一である、擧げ來れば政界のみの怪疑でも少なくない感がする。（七、二五南國生）